

# 法然の「起請文」

——特に「七箇条起請文」について——

伊藤 真宏

## 〔抄録〕

法然の文献には「一枚起請文」を筆頭に、「○○起請文」という題目のものが存在する。それらは本当に、「起請文」であるのか、という問題意識のもと、「起請文」とは何か、を知り、その定義に沿う法然の「起請文」を確認。その上で、法然自身が「起請文」とは意図していない文献が、後世の法然浄土教信奉者に「起請文」という形で伝承される現象について、その原因を探る。

ここでは「七箇条起請文」について、その内容を詳細に検討、「起請文」と名付けられる因由について「一枚起請文」との共通する文言を指摘した。

**キーワード** 起請文 法然 送山門起請文 一枚起請文 七箇条起

請文

## 一、はじめに

法然（一一三三～一二二二）には、その浄土教思想を明かす文献が、様々に存在する。中でも、いわゆる「一枚起請文」は、法然が示寂する二日前の建暦二年（一二二二）正月二十三日に、常在給仕の弟子、源智の要請に応じて、遺言の如き文言をしたためたもの、と伝承され、現在においても浄土宗の日常勤行に僧俗いずれもお唱えするものである<sup>1)</sup>。

起請文といった際、法然においては、概ね「一枚起請文」を想起するであろうが、法然には「一枚起請文」以外にも、「起請文」と付けられるいくつかの文献が存在する。

了慧編集の『黒谷上人語燈録<sup>2)</sup>』の題目を見渡すと、漢語系の「没後起請文」「七箇条起請文」「送山門起請文」、和語系の「七箇条起請文」を挙げることができる。これらの題目について、「一枚起請文」を含め、いずれも法然自身が付けたものではなく、了慧が命名したか、もしくはそれまでに伝承されて題目を付したと思われる。

起請文と銘打つからには、その定義のごとく、誓いを立てる対象となる神仏の列挙、背いた場合は罰を与えよという要請、日付の三点が要素であって、法然の「起請文」では、実に、「送山門起請文」のみがその条件を満たす唯一であるとみられる。「没後起請文」「七箇条起請文」「七箇条起請文(和語)」「一枚起請文」にはその要素が全て含まれているとは言えず、法然自身に起請文としての意図があったのか、という問題がはらんでいる。実際、「一枚起請文」は、『黒谷上人語燈録』では「御誓言の書」と題され、『法然上人行状絵図』では「一枚消息」と呼ばれている。<sup>(3)</sup>もし法然自身が「一枚起請文」と名付けていたら、他の題目が名付けられる余地はないであろうし、伝記や様々な文献に「一枚起請文」と伝承されるはずである。そういう問題を解明すべく、法然の「起請文」を吟味してみたい。本稿では特に「七箇条起請文」に注目して論じてゆく。

すでに、起請文の研究は、佐藤進一『古文書学入門』で詳細にまとめられ、最近では佐藤弘夫『起請文の精神史 中世世界の神と仏』があり、法然の「没後起請文」「七箇条起請文」については中野正明、「一枚起請文」に関しては安達俊英がそれぞれ一定の成果を挙げている。<sup>(4)</sup>それらの研究に触発されながら、法然の、ある文献が「起請文」と位置づけられていく要因を指摘できれば、ひいては、「一枚起請文」がどういう文献であるのか解明できることにもなろう。

## 二、「起請文」とは

周知の如く、「起請文」とは、神仏に誓約する言葉で、誓約内容に偽りがあれば、神仏から罰を受けるということを表明した文書である。しかし一概に「起請文」と言っても複雑で、時代の変遷によって形態も変化し、定義して「起請文」と一括するのは困難であろう。すでに安達が指摘しているように、「一枚起請文」もそれが「起請文」と捉えられるのは、その題目によるところが大きく、法然自身が「起請文」という意図を持って「一枚起請文」を書いたのかといえ、<sup>(5)</sup>そうではなく、訓戒教誡と見なすべきという。実はこれと同様に、「起請文」という文言が無くとも、その形式から「起請文」と見なすべきものや、逆に、起請と述べられていても、その形式を整えていないものがあり、定義の困難さが見て取れる。

そもそも「起請文」とは、佐藤進一によれば、その発生は、「祭文」と「起請」と予想する。「祭文」は神を祭る文書で、禍福災厄を除き幸福をもたらせることを願うについて祭壇に多くの供物を供えるのを将来にわたって神に約束・宣誓し、または、祈願成就の際の賽物を約束・宣誓し、その保障として、約束不履行な場合に神罰を受けても構わないことを表明するものであるという。

「起請」はもととも、事を発起して、それを実行することの許可を中央政府に請うことといい、実行を下命する際、実行内容が遵守されるよう、その保障を権力によって裏付ける役割を果たしたと見られている。ただ資料が限られており、それが一般化していたのかは不明と

いう。<sup>⑥</sup>ともあれ、これら「祭文」の内容と「起請」という文言形式が次第に「起請文」を発生させたと予測させられる。ただし、「起請」の段階では、まだ、約束が遵守されない場合に罰を与えよという罰文がない。

現存資料から最古の「起請文」といわれるのが、天禄元年（九七〇）の、良源（九一二〜九八五）による『廿六箇條起請』である（『平安遺文』二一三〇三所収）。この題目は、良源がつけたものではないとされ、本文中に「起請」の文字もないが、二十六カ条の禁止すべきこと、守るべきことなどを列挙し、最後部分に「謹仰大師之明鑒」とあって、伝教大師最澄（七六七〜八二二）という、既に亡くなっている祖師に対してその真实性を求めていることをもって、「起請文」の嚆矢と位置付けられている。しかし、この『廿六箇條起請』には、制誠に違背した場合に罰を与えよと要請する罰文がまだない。それが時代の変遷により、題目や本文中に「起請」と記されるようになり、さらに、内容に違背することのないようにという制誠に明記され、遵守できない場合には罰を与えよという罰文が付されてくる（仁平三年（一一五三）の覚法法親王の起請）。その時代以降、つまり十二世紀に「起請文」は、その文言の中で、誓いを立てる対象となる神仏の列挙、背いた場合は罰を与えよという要請、日付、これら三点があつて「起請文」と呼ばれる形式が備わってくる、と考えてよい。要するに、法然が生まれ、比叡山にて修行した頃、また法然が活動した時代、「起請文」は、まさに制誠に罰文が挿入されてくる過渡期であつたと言える。<sup>⑦</sup>

### 三、法然の「起請文」

法然の「起請文」と名付けられている文献の中で、その条件を満たす一つ、「送山門起請文」で、法然の「起請文」を確認してみよう。

#### 叡山黒谷沙門源空敬白

当寺住持三宝護法善神御宝前

右源空壮年之昔日、粗窺三觀戸、衰老之今時、偏望「九品境。是又先賢之古跡、更非下愚之所願。然近日」風聞云、源空偏勸念仏教謗余教法。諸宗依此陵夷、諸行依之滅亡、云々。伝聞此旨、心神驚怖。終事聞于山門、議及于衆徒。可加炳誠之由、被申達貫首畢。此条「一者恐衆勸、一者喜衆恩。所恐、以貧道之身、忽及」山洛之禁。所悅者、銷謗法之名、永止花夷之誹。若非「衆徒糾斷者、爭慰貧道之愁歎哉。凡弥陀本願云、唯」除五逆誹謗正法、云々。勸念仏之徒、爭謗正法。恵心要「集云、聞一実道、入普賢願海、云々。欣浄土之類、豈捨妙」法哉。就中源空、当念仏余暇披天台教釈。凝信心、於「玉泉之流、致渴仰、於銀池之風、旧執猶存。本心何忘。」且憑冥鑒、且仰衆察。但老後遁世之輩、愚昧出家之「類、或入草菴剃頭、或臨松窓言志之次、以極楽可為」所期、以念仏可為所行之由、時々以諷諫。是則齡衰「不能練行、性鈍不堪研精之間、暫置難解難入之門、」試示易往易修之道。仏智猶設方便。凡慮豈無斟酌「哉。敢非存教之是非。只偏思機之堪不也。此条若可」為法滅之縁者、向後宜從停止。愚朦竊惑、衆断宜

定。」本来不好化導、天性不専弘教。此外以僻説弘通、以「虚誕披露、尤可有紕斷、尤可有炳誠所、望也、所欣也。」此等子細、先年沙汰之時、進起請了。其後于今不變、雖不能重陳、嚴誠既重疊之間、誓狀又及再三。上件「子細、一事一言以虚言設会釈者、毎日七万遍念仏、」空失其利墮在三途、現当二世依身、常沈重苦永受」楚毒。伏乞、当寺諸尊、満山護法、證明知見。源空敬白」

元久元年《甲子》十一月七日 沙門源空在御判

私云執筆宰相法印聖覚也<sup>(8)</sup>

まず「叡山黒谷沙門源空、敬つて当寺住持の三宝、護法善神の御宝前に白す」と始まり、最後に「上件の子細、一事一言、虚言を以つて会釈を設くは、毎日七万遍の念仏、空しくその利を失いて、三途に墮在し、現当二世の依身、常に重苦に沈みて、永く楚毒を受けん。伏して乞う、当寺の諸尊、満山の護法、証明知見したまえ。源空敬つて白す」と述べ、日付と署名に判、となっている。この部分は竹居明男作成の「起請文等神文・罰文集成ならびに索引（稿）」でも掲載され、現在の専門家からも「起請文」と認識されていて、しかも法然の「起請文」では唯一「送山門起請文」のみが竹居の「集成索引」に掲載される。

住持の三宝と護法の善神という、「誓いを立てる対象となる神仏の列挙」、本文の「誓いの内容」、そして「上件の子細、一事一言、虚言を以つて会釈を設くは、毎日七万遍の念仏、空しくその利を失いて、三途に墮在し、現当二世の依身、常に重苦に沈みて、永く楚毒を受け

ん。伏して乞う、当寺の諸尊、満山の護法、証明知見したまえ」の部分が罰文と見て、「起請文」と認められるというわけである。

この罰文について、「上述の詳しい事情について、一事も一言でも、嘘の言葉で申し開きを用意しようものならば、毎日七万遍称えている念仏は、無意味で、その利益を失い、地獄・餓鬼・畜生道に墮ちて、現在と来世のこの肉体は、常時重い苦しみに沈んで、永遠に鞭打つ如き苦痛を受けるだろう。伏してお願ひ申し上げる、この寺の諸々の仏や菩薩がた、寺を護る全ての神々よ、真理の目でお認めになりますように」という意味であり、諸仏諸菩薩諸天諸神に対して三悪道に落ちることと受苦を願っていると読み取れる。

ただ、注意して読むと、自分がちよつとでも嘘偽りの言葉を並べ立てていれば、自分の称える念仏が意味のないものとなり、往生という利益を得られず、その結果仏道修行が積めずに輪廻することとなり、三悪道に墮ちて輪廻の苦しみに沈みそこから抜け出せない、という、自分のことを推量し表明しているのであって、「伏して乞う、当寺の諸尊、満山の護法、証明知見したまえ」の部分とは文脈が途切れていることに気づかされるであろう。「伏して乞う」のは、神仏に対して、みずからの真实性の立証を要請するのであり、罰を与えよ、というものではない。

法然は、この文章を、まさに「起請文」として草していることは疑いない。換言すれば、法然が「起請文」を書けば、こういう形式となる、ということである。その点から考慮しても、法然の文獻で「起請文」と名の付くものについて、よく吟味しなければならないというこ

とが明らかであろう。

そして、法然が「起請文」を意図して書いていないものが、後々「起請文」と名付けられたり、そのような文言として伝承されていくのには、いったいどういった原因が考えられるであろうか。あるいは、法然が「起請文」を意図して書いていないものが、どこをもつて「起請文」となされたのであろうか。それを「七箇条起請文」で探ってみよう。

#### 四、「七箇条起請文」

『黒谷上人語燈録』には同じ題目の「七箇条起請文」が二つ存在する。「漢語燈録」のそれは、法然が、高まりつつある念仏門の批判を避けるべく、門弟に七箇条の制戒を示して守ることを促したもので、元久元年（一二〇四）十一月七日の日付と在京の門弟一九〇名の署名を持つ原典資料が二尊院に現存する<sup>⑨</sup>。これは「起請文」と名付けられているが、その体裁を整えていない。先述したように、法然が「起請文」を書くならば、「送山門起請文」のような体裁になるのであり、「七箇条起請文」は、少なくとも法然は「起請文」のつもりではないと言えるであろう。

条文があり、その後に詳細がコメントされ、七箇条が出揃った後、この文書を出す意義が述べられて、日付と署名、そして在京の門弟一九〇名の署名が書き綴られている。

第一条は、「一、可停止未窺一句文章、奉破真言止観、謗余仏菩薩

事」とあつて、天台や真言を打ち負かし、また阿弥陀仏や極楽の菩薩以外の仏菩薩を謗ることを禁じている。その後、論破するような行為は学者のすることであり愚痴蒙昧の極みであるとコメントする。

第二条は、「一、可停止以無智身对有智人遇別行輩、好致諍論事」とあつて、無智の身で智慧ある人に議論を仕掛けていくことを禁じている。その後、議論は煩惱を沸き立たせるといい、そこから遠ざかるべきとコメントする。

第三条は、「一、可停止対別解別行人、以愚痴偏執心、称当棄置本業、強嫌喧之事」とあつて別解別行を嫌い、嗤うことを禁じ、『西方要決』と善導がそれを戒めているとコメントする。

第四条は、「一、可停止於念仏門、号無戒行、專勸姪酒食肉、適守律儀者、名雜行人、憑弥陀本願者、説勿恐造惡事」とあつて、淫酒肉食や造惡を恐れるなど説くことを禁じ、戒は仏法の大地とコメントする。

第五条は、「一、可停止未弁是非痴人、離聖教非師説、恣述私義、妄企諍論、被咲智者、迷乱愚人事」とあつて、經典や師の説を離れ私議を述べることを禁じ、その行為が悲しむべきとコメントする。

第六条は、「一、可停止以痴鈍身、殊好唱導、不知正法、説種種邪法、教化無智道俗事」とあつて、説教を好み邪法を説いて教化することを禁じ、芸能化したり布施を望んだり、妄説して世間を惑わせるなとコメントする。

第七条は、「一、可停止自説非仏教邪法、為正法、偽号師範説事」とあつて、邪法を正法といい、師の説と偽ることを禁じ、三部經を汚



し師を悪名としてしまうとコメントする。

これらは、まさに制誠というべき内容であり、「送山門起請文」とは趣きが異なることは明らかであろう。ただ、第一条のコメントに注目できる部分がある。

右至立破道者、学生之所経也、非愚人之境界矣、加之誹謗正法既除弥陀願、其報当墮那落、豈非痴闇之至哉。(右、立破の道に至りては、学生の経る所なり。愚人境界にあらず。加之、誹謗正法は既に弥陀の願に除く。その報い、まさに那落到墮つべし。あに痴闇の至りにあらずや。)

この「誹謗正法は既に弥陀の願に除く。その報い、まさに那落到墮つべし」という文言は、真言や天台といった浄土宗以外の宗派も、仏説による教学が展開される歴とした仏教であり、それを謗るについては正法を誹謗することになることを示し、地獄行きが必定である、と断定的に推量して、そのような愚かな行為をなすべきでない、と制している。この「本願から除かれている」行為、あるいは「墮地獄」となる行為ということが、キーワードである。

「和語燈録」第二巻の「七箇条起請文」は、これも「起請文」の体裁を整えていないもので、法然が「起請文」を意図したものでないことは明らかである。その構成は大きく二段に分かれ、先に三心に関する詳細な解説がなされる。至誠心は、浄土の菩提心と位置づけ、深心は、深く念仏を行ずる心とし、回向発願心は、常に退せず念仏する心

とする。また、煩惱を心の客人、念仏は心の主人として、前念後念には煩惱を交えても、六字の中に貪煩惱を起こすなど説く。この後に七箇条の法語が出される。

① 諸仏諸菩薩を謗るなどいい、その罪は阿弥陀仏の心に適わないもので悲願から漏れると説く。  
② 罪を造らないよう慎むことは本願を軽んじるとか、念仏を六万遍も称えることは他力を疑うことだ、というようなことを聞くが、「ひが事」と断じ、罪業を勧めるなど、「天魔のたぐい」で「外道のしわざ」と説く。また、念仏を多く申すものは自力を励む、という説も「ひが事」といい、他力を憑む心なら自力の念仏ではないと結論付ける。

③ 「三心」という名さえ知らない人の念仏には三心は具わらないということについて、それは不審であり、阿弥陀仏の本願による三心であるから、誰でも具えることができるという。

④ 人の心は目も慣れ、耳も慣れてくると、粗略になるので、ときどきは別時の念仏や不断念仏を勧める。

⑤ 臨終に正念を期して聖衆来迎を待つことを勧める。

⑥ 念仏を怠らぬことこそ一定往生を遂げる方法、と説く。

⑦ もっともらしく念仏して、いかにも念仏者のようになり、人が自分より劣っていて自分が優れた念仏者と思うことを戒め、傲慢の心を起こすなど説く。

以上のように、制誠の内容も垣間見られるとはいえ、通常の和語の法語である。実際、これと同じものが、『法然上人行状絵図』では第

二十一巻に、法然の「つねに仰せ」の詞の一環の法語として出てくる<sup>10</sup>。

「上人、念仏の行者の心得へき様をおしへ給へる事あり」という書き出しから、七つの法語が紹介される。「和語燈録」の題目は編者がつけたものであるが、少なくとも、「和語燈録」編集時点では「七箇条起請文」と伝承されていた系列と、そういう体裁でなく法然の通常の法語として伝承して『法然上人行状絵図』へと入っていった系列があつたことは言えるであろう。

いずれにしても、この和語の「七箇条起請文」は漢語のそれにもまして、「起請文」の体裁ではない。ここで注目したいのが①の法語である。

われは阿彌陀佛をこそたのみたれ、念佛をこそ信じたれとて、諸佛菩薩の悲願をかりしめたてまつり、法華般若等のめてたき經ともを、わろくおもひそしる事はゆめゆめあるへからず。よろづのほとけたちをそしり、もろもろの聖教をうたかひそしりたらんずるつみは、まづ阿彌陀佛の御心になふまじければ、念佛すとも悲願にもれん事は一定也

この最後の「悲願に漏れん事は一定也」がキーワードとなる。

以上、見てきたように、法然が、自身では「起請文」を意図しない漢語、和語の「七箇条起請文」であるが、いずれも「弥陀の願に除く」「本願から漏れる」という、「阿弥陀仏の本願に適合しない」という共通の概念を指摘できる。

## 五、おわりに

拙論を展開してきたが、ひとまずまとめておきたい。

「起請文」の変遷については、現存資料を一つずつ丹念に分析して、さらに厳密に、その推移をたどるべきところであろう。今後も確認作業を続けたい。

法然自身が「起請文」を意図したと思われる「送山門起請文」は、「起請文」の変遷を眺めるとき、諸仏諸神の列举と、制誠内容と罰文、日付のそろった、いわゆる「起請文」へと完成される過渡期に位置することが確認できた。

そこで、法然の「起請文」として伝承され、そう名付けられるものが、法然が「起請文」を意図していない、ということも確認できた。

そういう中で、漢語の「七箇条起請文」と和語の「七箇条起請文」に共通する、「阿弥陀仏の本願に適合しない」という文言内容が、後世の法然浄土教信奉者をして、「起請文」たらしめた、ということが言えるのではないかと指摘した。それはつまり、やはり「起請文」としての体裁を整えていると言えない「一枚起請文」の「二尊のみ心にはずれ本願に漏れ候べし」という一節に一致しているのである。

要するに、法然自身が「起請文」とは意図していない文献が、後々に「起請文」と名付けられたり伝承されたりすることについて、「本願に適合しない」ということがキーワードになっていると指摘できる。

〔注〕

- (1) 『法然上人行状絵図』四十五巻。
- (2) 『黒谷上人語燈録』は浄土宗第三祖良忠の弟子、望西楼了慧道光（一二四三～一三三〇、没年一説一三三一）が編集した法然の文献集成。一～十巻が漢語文献、十一～十五が和語文献、拾遺編として上巻が漢語、中下巻が和語の都合十八巻。漢語部分を「漢語燈録」、和語部分を「和語燈録」と通称する。了慧當時に伝承されていた法然文献を吟味し、一定の真偽判定の上で編集されている。
- (3) 『御誓言の書』は『和語燈録』一（龍谷大学善本叢書十五参照）。「一枚消息」は『法然上人行状絵図』四十五（続日本の絵巻下巻参照）
- (4) 佐藤進一『古文書学入門』  
佐藤弘夫『起請文の精神史 中世世界の神と仏』  
中野正明『法然遺文の基礎的研究』  
安達俊英『法然「一枚起請文」の文献的性格』（佛教大学総合研究所紀要別冊『浄土教典籍の研究』所収）
- (5) 「一枚起請文」が「起請」ではない、ということについては、その形態が一定の「起請文」とは全く異なるので、安達論考に賛同する。ただしいつ頃からその名称が「一枚起請文」と呼ばれるのか、ということについては、意見が異なるので、筆者自身の「一枚起請文」の検討については別稿にて検討するつもりである。
- (6) 『三代実録』の貞観十二年（八七〇）二月二十三日の項に太宰府が発起した四カ条の事項の許可を中央政府に起請したことが明記されているのが、「起請」最古の記録と見られている。（佐藤進一『古文書学入門』二三三頁参照）
- (7) 竹居明男により、起請文の集成と索引が作成されている。「起請文等神文・罰文集成ならびに索引（稿）」（『人文学』一五八、一九九五、同志社大学）。以降、一九九九年まで、都合五本の『人文学』に天平二十年（七四八）から元弘三年（一三三三）までの「起請文」の神文・罰文が収集されている。これら一つ一つについて、いちいち確認して「祭文」「起請」↓「起請文」という「起請文」の歴史の変遷や、

制誡に罰文が加わるという歴史をたどっていく必要がある。

- (8) 善照寺所蔵『漢語燈録』参照。この本は大谷大学所蔵の『漢語燈録』と同じ写本で、義山開版の『漢語燈録』に先立つことから、古本『漢語燈録』と呼んでいる。善照寺のホームページで全編公開されているので、直接確認することができる。
- (9) 「七箇条制誡」とも呼ばれる。二尊院に現存するその価値については、中野の厳密な資料批判によって、その時代に作成された概ね認められている。また中野は、「七箇条起請文」という題目で伝承されているが、「七箇条制誡」と呼ぶのが相応しいと述べている。
- (10) 拙稿「法然法語の出現——「つねに仰られる御詞」について」参照（『法然仏教学研究センター紀要』創刊号参照 二〇一五年三月佛教大学刊）

〔参考文献〕

- 佐藤進一『新版「古文書学入門」』（法政大学出版局）  
佐藤弘夫『起請文の精神史 中世世界の神と仏』（講談社選書メチエ）  
中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館）  
安達俊英『法然「一枚起請文」の文献的性格』（佛教大学総合研究所紀要別冊『浄土教典籍の研究』所収）  
竹居明男『起請文等神文・罰文集成ならびに索引（稿）』（同志社大学『人文学』一五八所収）

（いとう まさひろ 仏教学科）

二〇一五年十一月十六日受理